
とある少年の新しい日常

壱咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある少年の新しい日常

【Nコード】

N8270Z

【作者名】

吉咲

【あらすじ】

少年は不思議な声に呼ばれ、その声に応える。それは新しい出会いそして新しい日常への扉だった。

(ほのぼのファンタジー予定)

第一話（前書き）

前書き 初投稿になります。初心者で文才の欠片などない自分の投稿ですが、暇つぶしにでも読んで頂けるとありがたいです

第一話

「……もらえないか」

軽く意識に霧が掛ってるみたいなの、その向こうから聞こえる声

「貰えないか？」

なにを欲しがってるのか分からず、そう呟いていた・

その問いの答えとしてか、また声が聞こえてくる

「少年、我が子を助けてもらえないか」と

ん？助ければいいのか・どうやって

突然助けてくれと言われても困るのは困るが元来の性格から少年は「別にかまわないがどうすればいい」と姿の见えない声にまた問いかけていた。

姿なき声は柔らかくなり

「我・我が子のもとに来てほしい」と伝えてきた

「簡潔にお願いします、あなたの子を僕が助けられるなら頑張りますので目的地はどこでしょう……」

少年は声の主にそう呼びかけながら辺りを見渡した

ここはどこ……記憶が確かなら僕は部屋で寝ていたはず この暗い世界は……

少年が辺りを見渡しながら声の主からの返事を待っていると 前方に光が見えた

「あつちに行けばいいのかな」

少年は光に導かれるように歩み始める

そして、明かりの前にたどり着くとそこは先の見えない光の扉が存在していた

「えーと、声の主さん ここに入ればいいのでしょうか？」

「少年よ その先に我達はある すまないが来てほしい」

少年が光の扉をぬけると……

「で……でかい」

その大きな生き物を見てそう無意識に呟いていた

その大きな生き物とは、白い鱗のようなものにおおわれ背にはまた大きな翼、目は琥珀色に輝き大きな口をもっていた。

「り……りゅっ?」

「少年よ 我が声に応え 我がもとにまで来ていただき本当にすまない」

先ほどまでよりもはっきりと聞こえる声

少年はその声にやはり悪意などは感じられずほっとする

突然の事に思考をどこかに置いてきてたみたいで、その声に反応が遅れるが

「あ・そうだ 貴方のお子さんを助ければいいと聞いたのですが、僕に何が出来るのでしょうか？」

説明された事をまとめると、

生物には生素（魔力・魔素・生命力・気力などと世界によって呼び方はちがうらしい）
というものを持ち

自然界には同様に素（多種多様なので素とだけで表すらしい）と言うものがあるらしい、

それを体内で結合させいろんな現象などを起こす事が出来ると基本的にその生素は個々の特色をもっていて全く同じものはほぼ存在しないらしい。

そこでなぜ僕が呼ばれたに関係してくる

この大きい生物は天龍と言われこの世界で神獣（神に近いもの）
つてもものらしく個体としては1匹？

しか存在しないらしく 自分の次世代種（子供）を生み出したのはいいが、その子供には素を取り込む器官が弱く

自分の生素を維持できないらしく、また自分（天龍さん）は子供を生み出した事で能力が低下している事で生素を分け与えることができない状態にあると

その為自分と同じ生素の素質をおもつものを探して僕を見つけ
て声をかけたらしい

「状況は理解できましたでどうすればいいのか教えてください」

少年がそう天龍に問うと、天龍は大きな翼を広げその翼で少年を包み込んだ

そして天竜は光り輝き その光は少年を包み込んで、まるで少年の中に吸い込まれるように消えていった。

その途端、少年は激しいめまいに意識を手放しそうになるがどうか耐えていた

「すまない、少年少し手荒になってしまったが、知識の譲渡をさせてもらった」

「気にしないでください、これで状況もやり方も理解できました」

少年は軽く汗を流しながら天龍にむけて、いつものように笑顔を浮かべてそう答えていた

そして少年は天龍の翼に守られている 小さな龍に近づき腰を下ろして

「天龍さん この子抱えてもいいかな？」

この少年なら任せられると思

「ああ かまわないが」

「ありがとう」と少年は一言天竜につげ 小さな龍を抱きかかえた
さてと頑張りますか、心でつぶやきながら先ほど教えられた方法の
順序を確認していく

まずは、大きく息を吸い自分自身を平常心状態リラックスに落とし吸い込んだ
酸素を体中に血液と一緒に巡らせていく

その二つとは違う感覚が体にめぐっているのを確認しこれが生素か
と納得をする

次に小さな龍に手を添えて与えられた知識を使い自分の生素と小さ
な龍との生素と状態を確認して

「確かに呼吸と血液の流れに対して生素がほとんど感じられないで
すね」

そして自分の手に体内にめぐる 生素を意識して手に集め小さな龍
をまるで子猫を撫でるように優しく注いでいく

天竜は心配そうにその行動を眺めていた・・・

2時間ほど少年は額から汗を流し同じ動作を繰り返しながら頑張れ
頑張れと繰り返し小さな龍に語りかけていた

そしてそれは起こった 小さな龍の体から明るく暖かい光があふれ
その体に吸い込まれていった

そのあと少年はもう一度小さな龍に手を添えて確認していく

「ふう 大丈夫そうですね 天龍さんお子さんの確認よろしくお願
いします」

少年にそう言われ天竜は少年に抱きかかえられている我が子と少年を大きな翼で包み込むと・・

小さな龍からは生まれた時とは違う大きな生素の流れと大気から取り込まれていく素をはつきり感じ取れていた

「少年よ ありがとう これで我が子は救われる」

慈愛に満ちた琥珀色の瞳を我が子にそして少年に向けてそう語りかけていた

少年はその言葉に安心したのか大きく息を吐き大きく背伸びをしました小さな龍を優しく撫でていく

しばらくその空間には安らぎからの沈黙がながれていく……………

「少年よ お礼がしたいのだが何を望む」

その天龍からの問いに対し少年は

「別にいいですよ お礼が欲しくて助けたわけでもないし」といつもと同じ笑顔を浮かべていた

「そうかでも本当にありがとう では時間も残り少ないようなので少年を少年の世界にもどさなければな」

その天竜の言葉に少年は驚く、少年は読書家でありこのような状況の場合 大抵元の世界には戻れないと相場が決まっていたのである種の覚悟はしていたがその天竜の言葉に驚いてしまっていた

「戻れるんだ」

「安心してくれていい まだ少年の世界に続く道しるべはまだ切れていないと我の生素が切れる前に少年を送り届けよう」

その言葉に少年は違和感を覚えた

「切れる前に・・・」

先ほど譲渡された知識から生素とは基本的に減りはするが素を取り込むことで誤差はあるが回復するものであり切れる事はないはず、そして生素が切れる、無くなるなどはその生命の死を表すと言う事にたどり着く

そして少年は小さな龍にしたように天竜に触れ確認をして・・・

「少年よどうした」

突然の少年に体に様子が変わり体に触れられたのでそう問いかけていた

「なあ天龍さん 質問してもいいかな」
少年は先ほどとは違い少し低くそう天龍に声を掛けてきた 天龍の返事をまたず知識から自分の予想になるものを探し出しみつけてしまった

神獣に属するものは世界の安定や監視の為に存在するもの、また何かを守るもの制約がある者などもいるが、基本的に1種1個体であるものが多い

その理由として、自分の死期や何らかの原因で自分という個を維持できなくなる場合に自分の次世代種として子供を産み知識を与え死を迎える

そして天龍の生素が子供と同じように微かにしか感じられないことを

そこからの少年は早かった

天龍の体に触れてない手を伸ばし大気の素を無理やり自分の体に取り込み、触れてる手から天龍に小さな龍の時のように流し始めた

その少年の行動に天龍はあせり言葉を発した

「し・少年よそんな事をすれば少年の体が持たない そして少年の世界への道しるべが消えてしまう」

「そんなことは関係ない！目の前で消える命がありそれを助ける事が出来るならその方が大事だ それに僕は消えたりも死んだりする気もない」

少年の発する言葉とその意志の力に天龍は言葉を紡ぎ出す事が出来なくなっていた

「それに子には親が必要だと思っし親は子に知識だけ与える存在じゃない」

その言葉を最後に沈黙がこの空間を支配していく

時間が過ぎ去り 天龍は我が子と同じように大きな光に包まれその光を体に吸い込んでいった
そしてその優しく暖かい光を自分の体にめぐるのを感じていた

でもそれは少年が自分の世界に戻る機会を失い、来るべき明日という日常を手放した事を告げていた

第二話（前書き）

改行位置や一話の文字数などどれくらいがいいのか試行錯誤中です

第二話

「ん・・・」

あれ・枕ってこんなに柔らかだったかなと普段の枕と違い柔らかな感触と少し暖かさがある事を不思議に思いながら目を覚ますと

「目が覚めたようですね」

目の前にはシルバーの髪、琥珀色の瞳で優しく自分をみつめてる美しい女性がいた。

沈黙ののち少しずつ思考が動き出すと

「すみませんと」一言ののち慌てて起き上がり周りを見渡す

そして思い出す先ほどまでの事を自分が呼ばれ何をしたかと

「えーと貴方様は？」

自分の記憶では自分と天龍さんとお子様だけしかいなかったのも、変と思いながらも問いかけてみた

事情を説明されることになる、疲れて倒れた自分をそのままにしておくことも、起こす事も悩んだ末、

人化し膝枕をして介護していたと子供だけでなく自分も助けられ拳の果てには少年を元の世界に戻せなくという

状況に対してすまないとしか言えないがと謝ってきた

「いいえ 気にしないでください 僕自身でおこなった事ですから
それに謝ってもらうよりは」

その言葉と少年からむけられる笑顔という表情をみて天龍は

「本当にありがとうございます 子供を助けてもらっただけでなく
まさかわたくしも助けてもらっていただきまして」

「何度もお礼を言われてますのでその件はもう気にしないでくださ
い」

「そういえば 自己紹介してませんでしたね」

「僕の名前は暁昴あかつきすずのほです」

「アカツキスバル」その名前を呟き

「わたくしの名は天龍フォルティス 普段は使う機会すらありませ
んけど」

とやさしく微笑みかけてくれた

それからお互いに色々会話を続けた

昴は自分の事 両親とも小さな時に死別し母方の祖父に育てられて
いた事、その祖父がこの春に他界した事

で元の世界に戻れなくともそこまで大騒ぎにならなと思うと天龍を
安心させるかのように話をしていた

またフォルティスの方も自分の使命としてこの地にある特別な泉がありその守護と管理をしていた事
突然の自分の生素の減少に伴い急いで子を生み出した事など

そしてこの世界の事　ここはアレストリアといわれる大陸で大国と言われる6つ国と小国などで成り立っており
種族としては人間が大半をしめており、獣人族やエルフやドワーフそして魔族といわれる種族がおもにいるらしい
基本的現在大きな戦争などはなく小競り合い程度くらいだそうだ

昴は聞きながらよくあるファンタジー世界だなと納得していた

会話をしていくうちに昴はフォルティスにフルネームで呼ばれるのは慣れてないので自分の事はスバルでいいよというところ

フォルティスの方もなら天龍フォルティスではなくフォルテとよんでくださいとなりお互い呼び捨てにするのに抵抗があるようなのでお互いさん付けでという事で落ち着いたりしたやりとりがあった。

話してるうちにいくつかの問題があがった、

昴の今後の事、子供を生みだしたが最後自分の消滅の際に譲渡される核を渡せていないので

子供がまだ成体にならないという事などであったが子供の件は成体になるまで保護していくとなった

「我は汝の源であり　汝を守るものなり　汝は我の同胞であり　我の子である」

そうフォルテが唱え　子を抱きかかえると光り輝きフォルテの中に吸い込まれていった。

「これで個体としていくらか成長するまで私の中で育てていきます」

その光景とその言葉をきいてスバルは驚きもしたが、妊婦さんぽい
なと納得できてはいた

「あとスバルさんにお願ひがあります」

第三話

「お願いとはなんでしょう？」

この状況下でなんだろうと思いつながらスバルはフォルテに聞き返すと

「私と契約してほしいのです」

「え・・契約ですか」

そして契約する理由を聞かされた

理由？ 契約すると知識の譲渡の制限が緩和する（お互いの信頼度などの影響らしい）

理由？ 契約するとフォルテの制約優先度が変わり行動がとりやすい（これによりスバルの今後の手伝いが可能となるとの事）

大まかにいうとスバルさんにお礼もしたいし一緒に居たいからと美人さんに言われては断れないですよ

「わかりましたフォルテさん契約おねがいします」

「ありがとうございます。スバルさん早速ですけども右手を出してください」

スバルが右手をだすと

「少し痛いと思いますが我慢してください」

いきなり五本の指に切り傷をつけそのあと自分自身にも同じく傷を

つけ重ねてきた

「我は天龍フォルティス 互いの血交わりしを糧とし魂の結びつきを望む者なり また汝を我が主とし共に進む者なり」

そう唱えると重なり合ったお互いの手が大きな光に包まれ そして光が消えるていった。

「ちょフォルテさん最後の我が主ってどういうことでしょうか」

気にしないでください、些細なことですよと言われても

当然のごとくフォルテさんには呼び捨てでお願いしますスバル様と言われたらお話し合いになりました。

「ということでフォルテさん 呼び捨てにはできませんので」

「仕方ありませんね スバル様」

スバルは思う 出会った頃との差を どうしてこうなったんだろと

「では失礼しますね スバル様」
とフォルテはスバルを抱きしめ額を重ねてきた

「今回は知識の譲渡ではなく共有することによりお互いの世界での認識のずれを顧慮できると思います」

それから数日かけていろいろ今後について話し合いがあり魔法の習得や世界に常識や知識を学ぶスバル

魔法について

この世界に生きるものは一部を除き生素の種類を認識できているのではなく体内の魔力と認識し素をマナというもので

認識しておりそれにより自分の得意不得意などの根源は理解してない

使い方は通常詠唱を基本としているものを魔法と認識しているのがこの世界の常識である

国ついて

大国といわれる六ヶ国

・ 聖国フォエルシア 聖女と神官などよばれるものが納める宗教国家で大陸の北東部にある

・ 商業国家コロサート 大陸の中央にあり工業や貿易などがさかな国家

・ 魔都 ヴァニアス 少し特殊な都市で大陸の魔族の集落があつま

り都市にまで発展した為他の国家より圧倒的に魔族が多く南西部にあり海を挟んだ島でもある

・精霊国家エルファニア 精霊と自然と共にを基本として他の国家より自然が多い為エルフなどが多い 位置としては南東でフォエルシアと隣接している

・剣王国サルバーン 元々は太古の魔王侵略（現ヴァニアスから）時に大陸を護るための前線基地的な場所であつたため騎士などの家系が多く存在する国家で大陸の南西部にある

・魔導国家アラニス 魔法の研究などが盛んな国家でその為数多く優秀な魔法使いを世に出している 大陸の北西にある

魔物について

大陸には魔物と呼ばれる害なす物が存在しておりその生息地として迷宮と言われる場所などがある

注意する点として魔族と魔物は別物と覚えておくこと

「これでこうしてこれでどうかな」

スバルは魔法の知識の中から印と呼ばれる存在を見つけいくつか覚ええた魔法をつかい道具の制作をしていた

小さな袋に留紐をつけただけのものだがスバルは完成に大喜びだった

次に実験と洞窟におちていた大きめの石を袋に入れていく。石はいくつも袋の中にはいっていきどうみても許容量などとつくにオーバ―しているが
まだまだはいりそうだ

次にスバルは石を頭の中で想像して次々に石を取り出しはじめた。

「どうかナフォルテさん」

その様子にフォルテは「お見事ですスバル様　まさかそのような方法を思いつかれるとは思いませんでした。」

元来天龍であるフォルテには必要のないものであったので思いつかない物だろうが、完成を喜ぶスバルに優しく微笑みかけた

簡単に説明すると元々天龍の得意とする時空魔法で別空間を構成してもものを保管などする魔法をスバルは習得して

そのまま使うには怪しまれるかもと印と小さな袋に仮想空間をつくりそれに選別と出し入れ機能を付けたものが今完成したものである

次にスバルは洞窟にある鉱石拾い　袋に入れていく　フォルテ曰くこの空間洞窟は良質の鉱石できており人里で売れば生活費になるとスバルに進言し今後の為に持つていくことにしていた

「でもフォルテさん　本当にいいの　ここにいらなくて」

スバルの心配はフォルテはこの管理をしていたはずだしそれを放棄させていいものかと考えていた

「スバル様心配には及びません ここには普通のものはまず入れませんし 数百年の間訪れた者もいませんのでご安心ください

それに私はスバル様と居ることを望みましたので」

と言われるとスバルは顔を桃色に染め照れるしかない

「ありがとう 本当はここにいる方が安全だし良いとは思っただけどやっぱり男の子だし冒険もしてみたいんだよね」

ここ数日の話し合いでスバルはどうせ戻れないならこの世界を見てみたいとその為2人で旅をする事になっていた

そして、袋に鉱石や洞窟にあったフォルテの資産ともいえるものなどを詰め込み

「では行きますか スバル様」

という光の扉を創りだし 2人は新しい日常へと旅立つ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8270z/>

とある少年の新しい日常

2012年1月2日09時47分発行